

記して居る年に出来して、四十七年に刊行し、其の際御製序文を附せられたものかも知れないのである。此の清文鑑は自分はまだ見たことがないから、如何なる體裁であるかを述べることは出来ないけれども、これは決して滿漢對譯といふ様な形でない丈けは明らかである、皇朝文獻通考(二百十卷)によると、乾隆の増訂清文鑑の名を載せて、其の後に「臣等謹案……聖祖仁皇帝、慮口傳筆授或有異同、乃輯清文鑑一書、而音譯則未之及」とあり、四庫全書提要も略ぼ之と同じく、また雍正十三年に、董佳といふ人が清文鑑を基にして、音漢清文鑑なる書物を作つて居るが、其の序文を見ると、次の次第が見えて居る。「欽惟清文鑑、國語之大成、萬世之永賴……明鐸(董佳)朝夕敬讀、豁朦開塞、因於內廷供職之餘、手錄紬繹、時復心融意得、輒以漢文音釋。證之經史、徵之見聞、折衷參酌云々」と、尙ほまた増訂清文鑑の乾隆御製の序にも「皇祖仁皇帝……御定清文鑑全函、折衷大備、惟當時編纂諸臣、依國語分類排纂、未列三合切音漢字、註中間採經傳成語、以佐訓詁、日久易啓傳會穿鑿之習」と記してある、これによつて考へると、此の書は漢文字彙の體裁に倣つて、滿文の字彙を作つたので、一一の滿語に同じく滿語にて其の解釋を施したので、まだ漢字漢文でその發音意味を對照せしめたものではなかつたのである、私撰ではあるが音漢清文鑑に至つて、初めて漢文で其の意味を解き、乾隆の増訂清文鑑になつて、後に記するやうに、滿文の解釋を存するとともに、漢字で一々の發音と對譯とを示すことになつたのである。かゝれば康熙の時の清文鑑なるものは、此の乾隆増訂の清文鑑から、漢字の分を取り去つたものと考がふれば大差あるまいと思ふ(増補された言葉は勿論別として)。尙ほまた音漢清文鑑からしても大體推察することが出来る、なぜならば、此の書は大體に於て康熙の清文鑑の、滿文の解釋をすて、漢文を以て之に代へた丈けの相違であつて、其の凡例にも、原本の分門別類等はすべて準據して變じないといふて